第２２回青森県総合教育会議会議録

１　期　　日　　令和６年８月２９日（木）

２　開　　会　　午前９時

３　閉　　会　　午前１０時

４　場　　所　　第三応接室

５　議　　事　　（１）青森県立高等学校魅力づくり検討会議の状況について
　　（２）青森県教育改革有識者会議の状況について

６　出席者等

・出席者の氏名

宮下宗一郎（知事）

風張知子（教育長）、平間恵美（教育委員）、新藤幸子（教育委員）、安田博（教育委員）、松本史晴（教育委員）、中野博之（教育委員）

・説明のために出席した者の氏名

奈良浩明（総合政策部長）、後村文子（総合政策部次長）、田澤謙吾（総合政策課長）

長内修吾（理事）、早野英明（教育次長）、高橋和也（教育政策課長）、佐藤広洋（高等学校教育改革推進室長）

７　概　要

知事挨拶

総合教育会議の趣旨は言うまでもないが、知事部局としても青森県教育改革有識者会議にて議論を重ねており、様々な論点で委員の皆様から最先端の御意見をいただいている。

今年度は、小・中・高・特別支援学校における授業の在り方、県立高校における入試制度の在り方、人口減少下における学校統廃合を含めた県立学校の在り方について検討が進められているものである。

また、教育委員会では高校の魅力づくり検討会議を設置し、学校・学科の充実と学校配置の方向性について検討が進められていると伺っている。

こうしたことをしっかりすり合わせた上で教育大綱を仕上げていきたいという思いがあるため、今日も皆さんから忌憚のない御意見をいただきながら進めていきたいと思う。どうぞよろしくお願いする。

議事　青森県立高等学校魅力づくり検討会議の状況について

（佐藤高等学校教育改革推進室長）

青森県立高等学校魅力づくり検討会議の状況について御説明する。

教育委員会では、令和１０年度以降の魅力ある県立高等学校づくりに向け、本県の高等学校教育に関する知識、経験を有する幅広い分野の方々を委員とする青森県立高等学校の魅力づくり検討会議を令和５年５月に設置し、これまでの高等学校教育改革の取組の検証を行いながら、今後の方向性について検討を進めてきた。

第１分科会では、学校・学科の充実の方向性について検討を進め、令和６年２月に検討会議への報告を行い、また、第２分科会議では学校配置の方向性について検討が進められ、９月２日に開催される検討会議において取りまとめを行っているところである。

なお、各分科会における方向性については、地区部会からの意見も踏まえながら取りまとめが進められてきた。

次に、魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方としては、本県のこどもたちが必要となる力を身につけ、未来を切り拓き、豊かな人生を送るとともに、持続可能な社会の創り手となることができるよう、学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するため、御覧の３点についてまとめられている。

これからの時代に求められる力を身につけた人材としては、青森県や地域の発展に貢献できる人材、イノベーションを創出する志や創造性を持った社会を牽引できる人材、職業の多様化に対応できる人材などとし、その土台となるこれからの時代に求められる力として、不易な力、こどもたちの夢や志に応じた力、変化の激しい社会で求められる力を身につけることが必要とされている。

このような力を身につけた人材を育成するため、高等学校に求められることとして、生まれた場所や家庭環境に関わらず、全てのこどもたちに一定の水準を満たした教育や

誰一人取り残さないきめ細かな教育の提供、３つ目の各校の特色化や多様な主体等との連携・協働による教育活動全体での更なる魅力化などが挙げられている。

次に学校・学科の充実の方向性のうち、高等学校の魅力づくりについては、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実や、誰一人取り残さないきめ細かな教育に繋げるため、教育活動の更なる充実として、各校の特色を生かした取組やＩＣＴを活用した教育活動、特別支援教育の充実、多様な主体との連携・協働としては、高校や学校間の連携のほか、小・中学校、大学、地域や関係機関等との連携が挙げられている。

学科等の魅力づくりについては、知識・技術の刷新や土台となる基礎的・基本的な知識・技術の習得に加え、新たな時代を見据えた学科改編・新設の検討や、生徒の学習意欲向上の一体的な実施による各学区の魅力づくりとして、全日制課程では普通科等の各校の強みを生かした特色化など、定時制・通信制課程では、多様な学びの提供などが挙げられている。

学校・学科等の魅力づくりに向けた教育制度については、中高一貫教育、全日制普通科単位制等について、既導入校における教育活動をさらに充実させるとともに、取組状況も踏まえながら、他校における導入の在り方を検討することが挙げられている。青色の枠組みが学校学科の充実のまとめとなっている。

ここまでが第１分科会から検討会議への報告内容となる。

次に第２分科会における検討内容となる学校配置の方向性についてである。

まず、魅力ある高等学校づくりに向けた学校配置の観点について、全てのこどもたちに一定水準を満たした教育を提供することによるウェルビーイングの実現と、誰一人取り残さないきめ細かな教育を提供するとともに、こどもたちがこれからの時代に求められる力を身につけ、可能性及び能力を最大限に伸長できる教育環境の提供に向け、高等学校教育を受ける機会の確保、そして充実した教育環境の整備が挙げられている。

魅力ある高等学校づくりに向けた学校配置については高校を取り巻く環境の変化を見据えながら、中・長期的な視点で検討する必要があり、全日制課程では６地区ごとの学校配置、学校規模の標準、小規模校の配置、地域校制度については考慮すべき点が挙げられ、小規模校における教育環境の充実については取組などが挙げられている。

定時制課程・通信制課程では学校配置の継続、募集人員の見直し、学校配置の拡充、全日制課程と合わせた配置について考慮すべき点が挙げられている。

学校配置とあわせて検討すべき事項については、再編の方法、学級編制、通学手段の確保・通学支援、地域等から理解と協力を得る取組などが挙げられている。

最後に魅力づくり会議における今後の検討スケジュールである。

検討会議では９月２日に第２分科会から報告を受けた後、各分科会の報告内容を踏まえ、さらに検討を深め、令和７年２月に検討結果報告書として取りまとめ、県教育長に提出する予定となっている。

議事　青森県教育改革有識者会議の状況について

（田澤総合政策課長）

資料の２に基づいて説明させていただく。

まず、青森県教育改革有識者会議の委員一覧であり、現在常任委員の方が大谷議長及び森副議長を初め８名、特別委員が１０名となっている。

次に、本年度議論する論点として、昨年度の提言より抜粋したものであるが、大きく３点について議論している。

１点目としては小・中・高・特別支援学校における授業の在り方についてである。教職員とこどもたちとの対話や主体的な学びが実現できるような授業の在り方、あるいはイエナプラン教育の導入や、全国でオリジナリティを発揮しているカリキュラムの事例研究等を行っている。

２点目として県立高校における入試制度の在り方について議論している。入試制度の在り方そのものや、調査書・内申書の記載内容の大幅な見直しについて議論されている。

３点目としては人口減少下における学校統廃合を含めた県立学校の在り方について議論している。学校統廃合など県立学校の在り方や、こどもの学びの質を保障するためのオンライン授業やデジタル教材等の活用、各学校の特色化の促進、他県の事例研究なども行っている。

次に、本年度の開催経過等についてであり、これまで計７回の会議を開催している。

３つのテーマを中心に委員からの講演や委員同士での議論という形で行っている。

このうち第２回の会議では先ほど御説明があった魅力づくり検討会議の事務局から検討状況について御報告をいただき、情報の共有を行っている。

また、県内外の事例収集やアンケート調査も実施しながら議論を進めているところである。

次に、県内外の事例収集について御説明する。県外については高校の魅力化というテーマで北海道の大空高校、三笠高校について調査を行っている。

それから、学びの多様化について、不登校特例校の関係やイエナプランの認定校として学校法人ろりぽっぷ学園ろりぽっぷ小学校を訪問している。

また、公立の小中高一貫校として東京都の立川国際中等教育学校・附属小学校を訪問している。

続いて県内の事例調査として、教育ＤＸの関係で中泊町立薄市小学校、五所川原市立五所川原小学校を訪問している。

また、全国募集導入校ということで三戸高校、小中一貫校ということで、三戸学園三戸小学校・三戸中学校を訪問し、様々な御意見を伺っているところである。

続いて本年度実施しているアンケート調査についてである。

県内の小・中・高・特別支援学校に在籍する教職員及び小学校５年生から高校３年生の児童生徒を対象に調査を実施している。

集中実施期間について、教職員は７月２２日月曜日から８月１５日木曜日まで実施したもの。

児童生徒について、当初は教職員と同じ８月１５日までを期限として調査を進めてい

たが、ちょうど夏休み期間に重なってしまったため、若干期間を延長して９月８日までを集中実施期間として調査を実施しているところである。

主な調査項目として、教職員については有識者会議の認知度や業務改善の動きの有無等、学校内で自由に対話する雰囲気があるかどうか等について伺っている。

また児童生徒に関しては、学校が楽しいかどうか、心理的負担やストレスになっていることがあるかないか、相談する相手がいるか、授業について感じていること等について伺っている。

こちらの回答については○×という定量的な分析だけではなく、自由記述の部分の文章に注目し、ＡＩテキストマイニングを活用して様々な分析を行う予定としている。

なお、回答数について、教職員は集中調査期間の８月１５日現在で３，７１８名、児童生徒は現在実施中であるため集計中となっている。

最後にスケジュールについて、会議は９月にもう１回予定しており、計８回の予定となっている。

随時事例調査や意見交換等を行いながら１０月に議論の経過等を踏まえて知事へ提言を行う予定である。

その提言を踏まえて必要に応じて教育改革大綱の改定を行うという流れとなっている。

意見交換

（平間委員）

教育改革について、保護者、現場の先生方、県民の方々からとても期待しているという声が私達教育委員にも届いている。

これまで総合教育会議でも、教育委員会と有識者会議が一丸となって推進するということを何度も確認してきたと思っている。高校の魅力づくり検討会議では約１００名の委員が毎回思いをぶつけ合っているという報告を都度いただいており、意見の集約もしていただいている。入試制度についても保護者を含めこどもたちがとても気にしている。そこで、これから有識者会議からの提言があるとは思うが、やはりスピード感を持って推進するということが求められていると思われる。これから有識者会議と私達教育委員を含め教育委員会とのすり合わせを具体的にどう行っていくかということを、知事のお考えがあればお聞きしたい。

それから、先だって県の校長会から、来年度の予算に対する要望が出されたと聞いた。おそらくかなりの期待感を持って要望がたくさん出されているのではないかと思っている。これまでの有識者会議の報告にて、ＤＸ化については環境の整備と、予算の確保が大事だということであったが、それは私達もわかっている。現場の先生方からの要望では、人的配置、特にスクールカウンセラー等の配置についてあがっているが、それは実は私たちが学校視察の際に５年以上も前からいただいている要望と同じであり、残念ながらまだ良い方向に向かってないのではないかというふうに感じている。

そのため、できるものから迅速に形にしていくのがこれから重要と考えている。

私達教育委員も今まで以上に現場の声に耳を傾け、具体的な返答を求められていると

実感している。
　また、先日女性の県外流出の値も集計された。出生率もそうであるが、これは福祉だけの問題ではなく、こどもたちの教育環境を、夢を持ってここで学びを受けられるというものに整備するのは必須だと思っている。福祉との共有性はすごく重要だと思っている。例えば、現場にて不登校の小学生のこどもを持った母親は、ほとんどの方が仕事を断念するという事例が私達の団体でもよく見受けられている。そういったことも教育の分野でも一緒に考えていかなければいけないところである。実は働き方改革というところで、現場と福祉との連携については足踏み状態であるのが実情だと思っている。
　こどもたちの１年はすごく時間の流れが大きいものだと思っている。これから事業の具体的な推進に向けて､改めて知事にお考えがあればお聞きしたいと思うところである。

（知事）
　有識者会議とのすり合わせが必要だというのはそのとおりである。提言をいただいた際に皆さんから質疑を承り、その内容を私自身がしっかり把握するということと、それに加えてその提言を受けて大綱を作るということであるため、提言から大綱に至るまでしっかりと私たちが議論をする、深めていくということが大切なのだろうと思う。
　それから現場が大切だということはまさにそのとおりである。本日魅力づくり会議の報告もあったが、誰がいつからどのようにやっていくかということが大事であり、お経のようにならないよう、有識者の提言も、高校の魅力づくり会議の報告もそういったようにしていかなければいけないと思っている。我々と有識者会議とのすり合わせも大事であるが、現場にしっかりと浸透していくことが大事だと思っているため、校長会からどのような予算の要望が来たのか私は承知していないが、しっかり実現に向けて取り組んでいく必要があると考えている。

（新藤委員）
　平間委員が福祉との共有性について話をされていたが、やはり学校というのはある意味福祉的側面も大きいと考えている。ここで生きていきたいと思えるようにするためにはどうすればよいか考えていかなければならない。
　例えば高校の魅力化について、魅力化は恐らく今後の人口減少対策の一つになってくる。小学校から高校までの間に自分の言葉で青森のここが好きだと語れるようなこどもたちを育てていく必要があると思っている。
　それから、グローバル化に対して海外で活躍できるこどもたちに育てるということもよく言われているが、やはりその前に自分の思いを伝える力、自分の考えを持つ力が大前提として必要であり､そのためにはあらゆる場面で対話することが必要だと思われる。まず教えられて正解を答えていくことに慣れているこどもたちが多い現状で、自分の言葉で語れるということが、答えのない課題が多いこれからの時代において、とても大事な力だと思う。まずは対話をする機会をできるだけ多く設けていくことが必要になってくると思われる。
　私達大人側の方が魅力化に対し、通いたくなる学校とはどういう学校だろうか、なぜ学ぶのか、なぜ地域と一体になる必要があるのかということの答えを持っておく必要が

ある。こどもたちに伝える前に、先生方の間で対話をする等、大人側で対話をしていくことが必要になってくると思っている。

（知事）

「＃あおばな」という対話集会を高校と中学校で行っている。中野委員の職場でもある弘前大学附属中学校でもやらせていただいた。こどもたちと意見交換をするというか、対話をするとみんな率直である。遊ぶ場所がないから遊ぶ場所を作ってくれ等こどもらしい意見や、若者が行くところがないから若い人が流出するという意見があった。恐らくそれらは合っている。それについて私に答えがあるかというと、スーパーマンではないためあまり答えはない。毎回ほぼ同じ質問をしているが、一番衝撃的だったのが、「青森県の中で働きたいと思う人がいるか」という質問をすると、恥ずかしそうに１割２割ほど手を挙げ、「県外で働きたい人がいるか」という質問をするとみんな勢いよく手を挙げる。

これはみなさんと共有しておかなければいけないと思う。実際はもう少し県内に残ってくれるとは思うが、それが実は青森県の現状である。中学校や高校では青森県の中にいたいと思ってくれているこどもの方がマイノリティである。私達はこの現状をしっかり把握していかなければいけない。やはり魅力を伝えるというのはとても難しく、皆さんにも思い出してほしいが、大人や親がこどもに言うというのは押し付けになってしまう。そのため魅力を伝えるということはすごく難しい。教育の中でチャレンジしていることといえばあおもり創造学を高校の方で行っており、それぞれの学校が創意工夫の中で地域との関連を学ぶという取組をしている。その成果はしばらくすれば出てくると考えている。

先生同士の対話や、通いたくなる学校や、地域との関係でどういったことが必要であるか私達が答えを持っておかなければいけないというのはそのとおりである。私はやはり「ふるさとを育てる教育をしようということを私達が考えていかなければならない。」ということだと思う。今までは何となく偏差値が高く勉強ができればできるほど早く青森県外へ出なさいという話をされてしまっていた。

しかし、今まではふるさとを捨てるような教育をずっと行ってきたが、これからはふるさとを育てる教育をするということを、関係者一丸となってやらなければいけない。そういった際に、果たして本当に今の先生たちがそういった進路指導をしているかどうかである。先生たちも意外と自らがこどもの頃、青森県に仕事がなかったときのことを考えて、

「青森県には仕事がないから君みたいな生徒は文系に行って、ちゃんといい大学行って、大手の企業に勤めないといけないよ」という進路指導をしていないか、私はきちんと検証すべきだと思う。

むしろ本当に優秀なこどもは青森県でスティーブ・ジョブズ、Ａｐｐｌｅのように、そういった企業を立て、自分は全世界から人を引き寄せるのだというぐらいのこどものマインドを養成することの方がむしろ大事である。そういった教育が果たして本当にトップ校やその他の学校でもできているかということはとても大事であり、新藤委員への答えとしては、ふるさとを育てる教育をみんなでしましょうということを大きな基本コ

ンセプトにしていきたいと思っているところである。

（安田委員）
先ほど御説明いただいたが、魅力ある高等学校づくりの考え方については資料内容のとおりもっともなことと思っている。
毎年の生徒数の動向を会議等で報告されるが、どうしても予測どおりの生徒数減少が現実になっているのが非常に残念でならない。
このことが１つの要因として検討会議が立ち上げられていることと理解している。
私も前回の再編計画時に地区の委員をしていたが、その頃とはまた違った意味の検討会議になっていることと思っている。
生徒数の減少は誰もが気にしているところであり、私の周りでもこれから地元の高校がどうなるのか、統廃合がまたあるのかなど不安な声が多々聞こえる。もう誰もがこれ以上学校をなくしたいとは思っていないはずである。
そのためにもこの検討会議、有識者会議、また教育委員会としても議論を進めていかなければならないと感じている。
現在、各社新聞等で毎日のように小中高の児童生徒の活躍が報道されており、高校生に関しては各学校の生徒が既に魅力づくりを実行しているのではないか。
大きい学校、小規模校、どの学校もこの資料に書かれている何かしら足りないところがあるはずである。
しかしその部分を補えるようにしていくのも検討の一つと考えている。個別最適な学び、協働的な学び、誰一人取り残されないきめ細かな教育の安定した実現に向けて検討会議、各委員の皆様や有識者会議委員の皆様と一丸となって、こどもまんなか青森を実行していきたいと考えている。
また、先ほど知事もおっしゃっていたが、青森県がすごくいいところで、地元に残って仕事ができる魅力を伝えていくことを、私も小さいながら商売やっているため、ぜひ協力していきたいというふうに思っている。

（知事）
地元の採用もよろしくお願いする。
今、安田委員が言われたように、やはり学校をなくしたいと思う人はおらず、今日の話題として私立学校のことを申し上げると、野辺地西高校が五戸に移転するということがある。少なくとも五戸町にとっては３年ぶりに高校ができることで地域を挙げて大変良いニュースとして取り上げていただいている。おそらく地域の人たちもものすごく喜んでくれていると思う。
また、高校生・高校を中心にまちづくりが新しくできるというのは町にとって非常に大きいことである。人口が減少してこどもの数は確実に減っていき、これから特殊出生率が多少上がっても人口は減っていく。２を超えるまでは減り、２でキープである。そのため、どんどん減っていくという環境の中で高校ができるということは非常に大きい。もう少し言うと下北の方ではまた新しく看護学科ができるということもまたすごく大きい。今日新聞を見ると定員が１０人程に対して志望が３０人程来ているということであ

ったため、そういったニーズというのは地域に必ずあるということである。
　この魅力づくりで私から申し上げたいのは、これはこれで良いが、では今後どうするのかということである。
　今までは１クラス４０人で定員が満たされなくなれば何年か後に閉校の段取りとなっていくというとても緻密な方程式のようなものがあり、そこをどのように今回の魅力づくり会議でその答申を受け、変更していくのかというところである。
　Ｎ高のようなインターネットの高校が出てきて全国どこからでも高校に通えるということ、それに加えてスクーリングのような話を五所川原第一高校がチャレンジしてくれるという話がある。私立高校の中でいろいろなチャレンジが始まっているときに公立だけが前時代的な考え方のもとに再編しているのでは追いついていけないと思われる。
　魅力づくりというこの提言を受け、今までの統合の方程式をどのように変更していくのか、やはりゼロベースで見直していくということを含めてそこに食い込んでいかないと本丸の改革には程遠いと思われてしまう。
　地域で高校をなくしてほしいという人はいないが、その一方で入学者数がゼロになったらそれは必要ないということ。ただ工夫次第では全国からの募集だけではなく、様々な取組ができるはずだというチャレンジが魅力づくりだったと思うため、ぜひ教育委員会の方でもその点は考えていただきたいなと思っている。

（松本委員）
　先ほど知事の方から、青森県が魅力のあるところだという教育をしていきたいとのお話があったが、実は私は職業柄、裁判官や検察官の方、要は全国を転勤していらっしゃる方と話す機会がよくあり、青森は非常にいいところだという話をよく聞く。
　司法試験を合格して弁護士になるために司法修習生として青森県で研修する人もいる。司法修習生にもやはり青森が非常にいいところだと言う人もいる。一時期県外出身の司法修習生が何人か青森に定着するということが続いたこともあった。
　しかし私の方が実はあまり青森のことを知らず、裁判官が青森県内のあちこちに行ってそこはどこだという話を聞くことが結構ある。私達自身の青森県に対する意識というのは､まだまだ掘り起こせばたくさん良いところが出てくるのではないかと思っている。先ほどのお話を聞いて少しそれを感じたところである。
　それから、今回いろいろと魅力づくり会議や有識者会議等いろいろと大変素晴らしいものが形づくられていって、大変感心しているが、中心はやはりこどもだと思う。私の分野で言わせてもらうと、やはりこどもと言えども人格的な自立、要は憲法第１３条に幸福追求権というのがあるが、幸福を追求していって良い、つまり自分で主体的に、積極的に、能動的に学んで良いということも強く訴えるべきであると感じている。
　この政策理念としては素晴らしいものがあり、上から与えるというか、大人の方がいろいろ考えていることが多いが、今度はこどもの視点側に立ち、むしろあなたたちにはちゃんと学ぶ権利があって、好きなことはどんどん言っていってほしい、やっていってほしいということも強くて訴えてほしい。もちろん他の人の人権を傷つけてはいけないというルールがあるため、最低限のルールも教えるもの。そういったものも今回の政策の根底にあってもいいのではないかと感じている。もちろん、もしかしたら既にあるの

かもしれないが。
　まだまだいろいろと私達も検討しないといけないことがあるというふうには感じているため、これからも頑張っていきたい。

（知事）
　こどもの視点という意味では、今回の有識者会議のアンケート調査を小学校５年生から実施するということになっている。
　いろいろな意見が出てきてほしいと思っているのと同時に、やはりこどもまんなか青森というからにはそういったところもしっかりと考えていかなければいけない。こどもから見た学校、こどもから見た地域社会、こどもから見た青森というのがどのように見えているのかということは、私は意外と接しているので何となくわかるが、何となくわかるということではなく、定量的にもしっかり把握し、そこを軸に議論を進めるということは大事だと思われる。自分たちのことを前提にせず考えて、高校に行ったり中学校に行ったりすると、代表者はしっかりしているのは当然であるが、一般の生徒にも意見があるか当てるとみんな意外としっかりと話す。
　それは我々のときにはなかったことではないか。やはりそういった成長が見られるのはおそらく今の教育の大きな１つの成果だと思っており、そこを突き詰めていくということもすごく大事なことなのではないか。
　中野委員の職場である弘前大学附属中学校へ伺い、最後に勇気を持って誰か何かないかと言った際、テニスコートを作ってくれなど、予想外の質問があったこともよく覚えている。
　そういうことも含めて、こどもたちが今考えていることがこれからの検討の一つであり、全てではないと思うが、軸になるという考えはそのとおりであると私は思う。

（中野委員）
　私は仕事柄学校の中に入る仕事が多いため、学校の先生たちとの対話や生徒たちの様子を見てお話をさせていただきたい。
　まず大前提として、青森の先生方は本当に頑張っている。どうしても今は、先生が駄目だからという雰囲気があるが、本当に青森の先生方は頑張っていらっしゃる。私の専門領域である算数のことになるが、算数は県内で私的なサークルを作り、勤務時間外も一生懸命勉強されている。
　ただ一方で、やはり中央志向というか自信がないというか、東京の先生方の話が一番正しいのではないかというようなこともあり、もっと自信を持って自分たちがやっていることに価値を持ってほしいといつも思っている。そういう点でいうと、私は教育委員会でもいつもお願いしているが、先生たちを励ましてほしい。知事自ら、全県的なところで先生たちを励ましていただきたい。決して恥ずかしいことをしているわけではないということを大前提にしたい。
　ただやはり一方で、先ほどの話もあったが、いわゆる進路指導等も含めて、どうしても親は近い目の前の受験をしっかり指導してもらいたいという思いがある。しかし先生たちは長い目でいつか周りの大人がいなくなるのだから、主体的な態度等を育てたいと

いう両者のジレンマがある。そのため進路指導をしっかりお願いしますという親もいて、先生たちもそうしないとこどもは駄目だと考えている先生もいる。

しかし、主体性を育てたいこどもが自ら学ぶことを待ちたい、我慢したいという先生もいらっしゃるジレンマを、特に後者の主体性を育てたいという先生たちをどう励まして青森県全体の先生たちの意識改革をしていくのかは、全体的な雰囲気や社会の雰囲気など、そういったものが必要であると思っている。

先ほど学ぶ意欲を育てるという話もあったが、学ぶ意欲そのものを学習することが大事であり、生まれながらに持っている訳ではなく、周りの大人とかロールモデルというか、「私もああいった大人になりたいな」というところから意欲というのを学んでいくため、やはり先生方はそれを意欲的に授業改善に取り組んだり、先生たちの対話を通して、対立を乗り越えてある事業を立ち上げたりというようなところを先生たちが見せていく中でこどもたちも学んでいくのかと思うと、やはり先生たちの挑戦や主体性を育てようとしている姿を、いわゆる学校関係者だけではなく、社会全体で支えるようなものにしていけたらいいと考えている。

また、今日の有識者会議の資料でもあったイエナプランやそういった新しい教育があるが、青森県は少子化が進んでおり、小規模校も大変多く、実質的にそのような形式になっている。例えば私が去年指導した教職大学院の現職の先生は、小中併設校でイエナプランのように異校種交流のようなことを実際にやっている先生もいらっしゃるため、そういった草の根でやっている先生をぜひ取り上げていただきたい。新しく「イエナプランです」と言うと先生たち怖がってしまうため、「皆さん普段やっていることを少し発展させませんか」という形で行っていけば、先生たちの抵抗がないのかと思う。急激な改革は必ず揺り戻しがきてしまう。実は私がやっている算数も２０年間でかなり教科書の内容がじわじわ変わっている。そのため、やはり急激に変えるのではなく、じわじわ変えていくような形もあるのかと思う。

それからもう１点について、イエナプランのように小規模の学校で居心地良く育っているこどもたちが、大きい学校に行った際に非常に萎縮してしまう事例があり、レジリエンスというか困難に立ち向かった際に、しなやかに立ち直る力を身につけて欲しい。

これは教育委員として話をしなければいけないことだと思うのだが、非常に居心地のいい中で育ち、外に出ると内側に帰ってきてしまうということにならないようにしていきたいと考えている。そのためレジリエンスというかそういった立ち直る力、これを間違えると「だから厳しくしなければならない」と間違った教育方針になってしまう。

外へ行ったときに厳しい世界が待っているのだから、今ここで先生が厳しくしないとこどもたちのためにならないという、間違った方向にもなってしまうため、ぜひそういった主体的に動くかつレジリエンスのようなものも育てていただきたいと思う。

それからもう１つだけ。先ほどウェルビーイングという話が出たが、ウェルビーイングというのも、実はＷＨＯが言っているものとＯＥＣＤが言っているものは若干異なり、ＷＨＯは幸福で健康な状態であるが、ＯＥＣＤが言っているのは主体性という言葉が非常に強く、今の世の中を自分で変えていく、そういったエージェンシーというのが非常に言われている。そのため、「誰かが悪いから自分はうまくいかないのだ」ではなく、「うまくいかないのであれば自分で何とかしろ」という世界であり、そういった点で言

うと非常に厳しいものでもある。ある学校の校長先生へこどもが担任を変えてくれと言いに来た際、その校長先生は「あなたたちのクラスでその先生を育てる組織を作り、その先生を育てなさい」と答えた。むしろその担任が悪いから私は駄目なのではなく、その担任の先生とどうすればいいのか自分たちで何とかしようという、そういった主体性も育てていかなければいけないということだと思う。先ほど松本委員がおっしゃったように、何でも誰かにやってもらうのではなく、自分たちで何とかするのだという姿も育てていくような社会的な雰囲気というか、人のせいにしない社会的な雰囲気のようなものを私達も一緒に作っていきたいと考えている。

（知事）

私も現場の先生方１人１人の高い技術と、その専門性で支えられていると思っており、それに加えてやはり授業という意味でも指導という意味でも生活指導という意味でも、スキルアップできる環境が求められているのだろうと思っている。

一方でそのことに水を差すわけではないが、やはり親から見て、あるいはそのこどもたちから見て､本当に適切な指導をしているのだろうかと思う方々もいらっしゃるのは、おそらく一面で真実だと思われる。

そのあたりをどのように先生方の中の成長をサポートするかということは、高校の魅力づくりに関してもそうであるが、学校全体の魅力の向上にとって、本当に必要不可欠なことだと思う。

どうすればいいかということは少し置いておいて、イエナプランというとみんなが少し構えるという話の一方で、確かに複式学級も含めて小規模校や小中一貫を同じ校舎でやっているところは、イエナプラン的な教育を行っているところもある。

ただ、私も９年間市にいて思うのは、割と校長先生次第であったり、先生次第だったりという属人的な要素の中でそれが行われたり、行われなかったりする。

青森県内を例にすると少し支障があるが、麹町中学校はとてもいい例であり、校長先生が変わって一気に別の教育方針になってしまったという世界観はあると思われる。

中野委員からおっしゃっていただいたように、まさに草の根でやっている先生にショーアップし、いろいろな講演や研修していただくのは一つの手だと思う。一方で、やはり私が今の話聞いていて思ったのは、これは聞いてみたいのだが、何の空気が支配して、改革を阻んでいるのかが、この業界でわからないところ。仮に校長先生にやる気があっても、学校の校風や今までやってきたことに飲まれ、本当はやりたかったことを２年間だからできなかったという話もよく聞く。

一方で、若い先生はいろいろなことをやりたいができない。そうかと思えば、学校単位できちんとうまくやっているところもあったりする。いろいろな行政分野がある中で、例えばトップが号令をかけ、スピード感を持ってできる分野の方が多いと思うが、教育分野はなかなかそうなっていない気がする。

これは一体なぜなのだろうか。現場の代表として聞きたい。長内理事も現場の代表だとは思うが。

（中野委員）
　言ってみれば属人的な話になってしまうが、やはり先生たちの方で自分が学んできたことを、そのままこどもにやろうとしてしまうと、やはり待つ、育てるということよりも、教えたいと思う空気感がある中で、そんなことをやるとこどものためにならないのではないか。自分が今までやってきたことと違うやり方をやれと言われると、意欲のある若者はできるが、というのはあると思われる。私も実は算数教育に携わり、非常に素直に話を聞いてくれるが、授業が変わらないというのはこの２０年間ある。変えている先生もたくさんいらっしゃるが、変わらない方もいる中では、「こどもは放っておけばうまくいかないため、こちらが教えてあげなければいけない」という雰囲気は、青森に限らずどこの地域でもあると思われる。
　そのためさっき松本委員がおっしゃったように、こどもにやらせれば結構できる、こんなことが言えるのかと驚く先生がたくさんいらっしゃる。

（知事）
　おそらくマインドセットのようなものが必要である。世の中がこれだけ動きが早く、かなりいろんな物事が変化している。ただ一方で教育は不易と流行だとかいうよくわからないことも言い始めているが、本当に世の中というのはどんどん変化していく。変化していくことの方が正解だというマインドセットを、私達もそうであるが現場も含めて行っていかなくてはいけない。
　そのためにどういったことをしたらいいかが大事であり、逆に魅力づくりの会議は民間の人たちというか、地域の人たちが中心になって考えていただいているため、そういう意味ではおそらく変化の方をとても柔軟に捉えていると思う。
　結論から言うと、学校の中で実現していくためにはやはり先生方や学校側が変化する方が正しいというような、同じことをやることももちろん正しい部分もあるかもしれないが、変化の方が正しいという受けとめをしてもらえるような環境を作っていくことはとても大事なことだと思う。ぜひその点は実践できる学校があると思うため、お願いできればと思っている。

（中野委員）
　最後に私ばかりで申し訳ないが、コロナを経て、かなり先生方の意識が変わったと思われる。答えのない難問に先生が立ち、学級閉鎖にすればいいのか学校閉鎖にするのか何もしないのがいいのかというところの中で、どれも正解であり不正解であるということを先生が行ってきた。私が講演や助言等に行った際に、変化の激しい社会とは答えが１つじゃないということを言うと、皆さん「うん」と言ってくださるようになった。かつては算数の答えは１つでしょうとかなり抵抗があったが、コロナはかなりそういう点では社会的な状況が変わってきたため、今が実はチャンスかと思っているため、そういう意味で言うと有識者会議の提言は非常に大きなものかと思っている。

（知事）
　後押しができれば良いと思う。

改革したいマインドのある先生方の後押しをして、少しずつ気持ちが切り替わるきっかけに今回の総合教育会議も有識者会議の提言も高校の魅力づくり会議も、そういったきっかけづくりになってくれたらいいなと私はとても思っている。

（教育長）
いろいろ議論いただきありがたい。
私も視察に伺っており、本当にこどもたちが目を輝かせ元気で、農業高校に行くと、土をいじりながら「日本の食は私達が支えていきます」というようなことを言ってくれ、生徒と廊下で会うとどの生徒も「こんにちは」と元気よく挨拶いただいている。本当にこどもたちのために、それぞれの花を咲かせてあげられるようなことをしたいと行くたびに思っている。
そんな中、高校については、入れる学校ではなく、入りたい学校にこどもたちが行けるような、そのために各学校がそれぞれの特色を生かした魅力的な選ばれる学校になっていって、進学校だけがいいわけではなく、いろいろな学校がそれぞれの魅力を持ったものになっていただきたいと思っている。そういったことも、どのような形で進めていったらよいか皆さんとも相談しながら考えていきたいと思っている。
それから、先ほど若者の県内定着率が低いという話があり、青森県の良さをまず実感してもらえるようにと新藤委員からいつもお話をいただいており、私も全く同感である。あおもり創造学でだいぶ意識は変わってきていても、ただそれだけで急に青森愛が育まれるわけでもなく、やはり日常においても高校だけではなく、何らかの形で、先ほど知事がふるさとを育てる教育を基本にしようということをおっしゃってくださったが、そういったことを青森の特色として何か方針の中に埋め込んでいくようなことをこれから議論できていったらいいと思っている。
いろいろ話は出ているが、魅力づくり会議もこれまで時間もかけて多くの方々がいろいろ議論してくださり、有識者会議の皆さんも青森のこどもたちのためにいろいろ議論を重ねてくださっているため、この両会議の強みを生かしながら、全国一律のものではなく青森県独自の基本にはふるさとを育てる教育を横断的に行い、青森独自の素晴らしい方向性を示せるようなことを、この後両方の提言を受けて作り込んでいけたらいいなと思っている。
また、こういう場でなくとも教育委員の皆さん及び知事と御意見をいただき、議論しながら独自の「らしい」方向性が示すことができればと思っているため、今後ともどうぞよろしくお願いしたい。

（知事）
本日も皆さんと率直な意見交換を行えて、非常に私自身も勉強になった。高校の魅力づくりの方針というか、資料の５ページの多様な主体との連携・協働の中の高校間・学科間の連携が項目として出てきたということに、ものすごく高い評価をしている。高い評価というか、本当にありがたいという思いである。委員の皆さんも本当によく考えていただいたと思っている。というのも、魅力づくりのために各校特色のあることを行わなければならなく、そして教育長がおっしゃったように、入れる学校ではなく入りたい

学校にというのはすごくいいコンセプトだと私は思う。

ただ一方で地域の学校を存続させ、自分の身近な学校に行くということも大事だということを考えると、勉強や授業の部分は一番いい授業を受けられるようにするということもとても大事である。

今はオンラインも進んでいるため、高校間、学科間で数学や英語が進んでいる生徒は、進学校と言われるところの授業を受けられるなど、そういったことが身近な学校でできる。一方で、地域のこどもたちと一緒に学べるということの一つの方向性だと私は思っている。これは素晴らしいことだと思っており、会議で提言して終わりではなく、どうやって進めていくのか、どういうロードマップで行っていくのかということも含め、今後教育委員会の皆さんのところで議論を重ねていっていただきたいと思う。

有識者会議の方は、現場を応援する、現場の改革マインドのスイッチを入れるというところを応援できるような提言になるよう、改めてお願いをしておくため、引き続き連携して取り組んでいければと思う。